

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520026

研究課題名(和文)スピノザの自然哲学の形成に関する研究

研究課題名(英文)Research on the process forming philosophy of nature in Spinoza

研究代表者

黒川 勲 (KUROKAWA, Isao)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：20264319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はスピノザのコナトゥス論の意義の解明を目指す。そのために、17世紀の西洋哲学・科学を視野に入れ、スピノザの自然哲学の形成過程の吟味を行う。研究成果として、スピノザの哲学はコナトゥスの現象の哲学であり、強い決定論である。また、存在論・認識論的な個物の理解は神の力とコナトゥスに基盤があることが明らかとなった。さらに、スピノザの哲学体系・自然哲学において、スピノザの方法論の内的・反省的特徴を示した。

研究成果の概要(英文)：In this research I would try to understand Spinoza's theory of Conatus. For this purpose I would examine Spinoza's the process forming philosophy of nature through 17th European philosophy and science. The property of Spinoza's philosophy signifies that it has character of phenomenon of Conatus and emphatic determinism. And Spinoza's ontological and epistemological recognition of individual things is based on his theory of God's power and Conatus. In Spinoza's philosophy and physics his philosophical method signifies the intrinsic and reflexive knowledge of realities and its ideas.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：スピノザ 自然哲学 コナトゥス 延長 物体 個物 方法 神

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、スピノザ哲学の核心は「自由」であり、その際、自由の基礎付けがいわゆる「コナトゥス (Conatus)」にあり、しかもコナトゥスの解明のためには物体論・自然学的なアプローチが不可欠であるとの着想をえた。1970 年代以降、欧米においても、スピノザ研究は「スピノザ・ルネッサンス」と呼ばれるほどに高まってきているが、マシユレによるマルクスとの比較、ドゥルーズの「表現」に注目した研究などを初めとする、いわば自然主義的・構造主義的な探求が主である。本研究も大きくはこの文脈の中に位置づけられる。

また、スピノザのコナトゥスの実相を解明するために、ホッブス、デカルトとの関係を考察することは従来の研究の定石的なアプローチである。同様に、昨今スアレスに代表される後期スコラとの関係に注目した研究が国内において見受けられるようになってきている。その際、物体論・自然哲学に注目することも新規な観点とは言い難い。

(2) しかしながら、従来の研究はスピノザの独自性を際立たせるあまり、これらの哲学との連続性・哲学史的連関を軽視している傾向がある。なかんずく、スピノザの物体論・コナトゥス論・自然哲学を論じる際に、スピノザの自然学的著作のすべてを包括した上で、かつ西洋中世科学論及び 17 世紀科学革命を視野に入れた研究はほとんどなされていないのが現状である。

(3) 本研究は、内外の関連する研究動向の大きな文脈の中に位置づけられるが、各々の哲学者の自然観との比較を通して、中世哲学・ルネッサンス期の自然哲学を含め西洋哲学史の中にスピノザを明確に定着することに貢献しようとする。

なお、スピノザの自然学的著作のすべて

(『往復書簡集』におけるボイルとの化学論議、未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』を包括した上で、かつ西洋中世科学論及び 17 世紀科学革命との文化的関係の吟味による考察は国内では、工藤喜作氏、藤本吉蔵氏の先駆的な論考が僅かにあるのみである。

## 2. 研究の目的

(1) スピノザのコナトゥス論がホッブス・デカルトの強い影響下にあることは内外の研究者によって指摘されている。しかしながら、スピノザがホッブスの物体論のどの部分からコナトゥス論を取捨選択したのか、またデカルトが次第に関心を失ってゆくコナトゥス論を、それと知りながらなぜ彼の哲学の中に消化吸収したのかについては説明が十分ではない。また、西洋中世科学論における物体観・運動論との関係、ブルーノ、カンパネラ等のルネッサンス期の自然哲学との関係もスピノザを哲学史に位置づけるためには不可避の課題となる。

これらの課題については、「科学研究費補助金：基盤研究 (C) 平成 15 年度 - 平成 16 年度；スピノザの物体論に関する研究」及び「科学研究費補助金：基盤研究 (C) 平成 20 年度 - 平成 22 年度、研究課題名：スピノザの自然哲学の全体像に関する研究」によって、一定の成果を得ている。

(2) 本研究では、これまでの研究成果を踏まえ、新たにスピノザの自然学的著作のすべてを包括した上で、かつ西洋中世科学論及び 17 世紀科学革命を視野に入れた研究を行い、集中的に精査することによって、スピノザにおける物体論、コナトゥス論、スピノザの自然哲学の全体像、ひいてはスピノザの自然哲学形成の文化的過程・背景の解明を目指す。具体的には、以下の課題を解明することとなる。

スピノザの物体論・コナトゥス論のホッ  
プス，デカルトとの比較研究

スピノザの自然哲学の全体像を明確化す  
る研究

スピノザの自然哲学の形成過程を西洋中  
世科学論及び 17 世紀科学革命との文化  
的連関を把握する研究

スピノザの自然哲学の中世哲学・ルネサ  
ンス期の自然哲学との連関を把握する研  
究

### 3. 研究の方法

本研究は，ホッブス，デカルト及びスアレ  
スとの比較研究を踏まえ，さらに新しい視点  
として，スピノザの自然学的著作のすべて  
（『往復書簡集』におけるボイルとの化学論  
議，未邦訳科学的著作『虹に関する代数的論  
断』及び『確率に関する論断』）を包括した  
上で，西洋中世科学論及び 17 世紀科学革命  
との関係に注目したものであるから，本研究  
の研究手法の概要は次のようになる。

(1) ボイル，ホイヘンス等の 17 世紀科学革  
命期の科学論・自然哲学に関する西洋科学論  
及び西洋近世哲学関係図書などの資料の入  
手と分析を行う。

(2) ボイルに関しては、『懐疑の化学者』、『形  
相と質の起源』、『原子論哲学について』等の  
科学論・自然哲学的著作を中心に「原子論」，  
「粒子論」をはじめとした「物質理論」を正  
確・緻密に解析して，明確に抽出する。

ホイヘンスに関しては，粒子論に対する  
「機械論的光の波動説」をスピノザの光に関  
する説と比較検討する。

(3) スピノザの『往復書簡集』，未邦訳科学  
的著作『虹に関する代数的論断』及び『確  
率に関する論断』の試訳を行うとともに，17  
世紀科学革命における「原子論」，「粒子論」  
との比較検討，デカルトの光学，パスカルの  
確率論との比較検討を行う。

(4) ホッブスに関しては物体論；『De  
Corpore』の精査と文献・先行研究の資料収  
集に努める。

(5) デカルトに関しては物体論；『Principia  
Philosophiae』，『Meditatio』，『宇宙論』の  
精査により，デカルトの物的世界的構成を  
抽出し，スピノザのそれと比較考察する。そ  
の際，「最単純物体」・「複合物体」・「延長」・  
「分割」などの観点から正確・緻密に解析し  
て，明確に抽出する。

(6) スピノザの思想形成の初期・スピノザ  
のスコラ的素養に影響を与えた 17 世紀オラ  
ンダのスコラ哲学者アドリアン・ヘーレボー  
ルトのテキスト（主著『Meletemata  
philosophica』（1654年初版と1665年版）と  
『Philosophia naturalis』（1665年版））の  
該当個所の翻訳を行う。

(7) スアレスに関しては，国内の研究・翻  
訳が十分ではないことから，Suarez『Opera  
Omnia』の物体論・運動論の該当個所の翻訳  
を行い，「実体的形相」・「質料」・「延長」な  
どの観点から正確・緻密に解析して，明確に  
抽出する。

ブルーノに関しては，『原因・原理・一者  
について』、『カンデライオ』，『無限・宇宙・  
諸世界について』の自然哲学・形而上学的著  
作を中心に「原因」，「物的世界的構成」の解  
析を行う。

(8) 西洋中世科学論に関しては，特に運動

論についてオーヴィ『神学命題 2 巻問題集』における「傾向説」、マルキア『神学命題注解』の「残留力」、そしてピュリダン『アリストテレス自然学 8 巻問題集』の「インペトウス説」に注目し、西洋中世科学論の西洋近世哲学関係図書などの資料の入手を行い、中世における「運動」と「力」について正確・緻密に解析して、明確に抽出する。

#### 4. 研究成果

本研究の具体的成果は以下のようにまとめられる。

(1) まず、スピノザにおける物体論、コナトウス論、スピノザの自然哲学の全体像、ひいてはスピノザの自然哲学形成の文化的過程・背景の解明を目指し、本研究の基礎を得る取り組みは以下のようにまとめることが出来る。

中世・17 世紀科学革命期の科学論・自然哲学に関する西洋科学論及びホッブス、デカルト等の西洋近世哲学関係図書の入手と分析を行い、特にデカルトの『宇宙論』に注目し、スピノザの物体論・コナトウス論との比較検討を行った。

スピノザの『往復書簡集』の内容を吟味し、形而上学類と科学類に大きく大別し整理するとともに、科学的著作『虹に関する代数的論断』の一部の試訳を先行邦訳書・英訳書を参考におこなった。整理するとともに、『虹に関する代数的論断』及び『確率に関する論断』の書誌学的確認を行った。

ボイルに関して、「懐疑の化学者」、「形相と質の起源」、「原子論哲学について」等の科学論・自然哲学的著作を中心に「原子論」、「粒子論」の観点から精査した。

スピノザ『エチカ』の主題・体系的構成を整理確認するために、ドゥルーズ、メイヤー等の研究書の翻訳及び比較検討を行った。

また、『エチカ』第 2 部に見られるスピノザの物的世界的枠組を、スピノザの形而上学から再点検するとともに、スピノザ特有の個体・個物観についての明確化を行った。さらに、『エチカ』の主題・体系的構成を整理確認するために、ウォルフソン、カーリー等の研究書の解読及び比較検討を行った。

(2) 上記(1)の取り組みに基づいて、スピノザの物体論、コナトウス論、スピノザの自然哲学に関する研究成果は以下のようにまとめられる。

『エチカ』第 2 部に見られるスピノザの物的世界的枠組みの考察を行った。その結果、スピノザの物的世界は最単純物体を基本単位とする階層的な世界であることが明らかになると同時に、実体・様態関係から統合的な世界像を結ぶものであることが明らかになった。

スピノザの自然哲学を含めた哲学全体の「方法」概念を明確化するために、方法論的著作『知性改善論』に見られる「真の観念」に注目し、方法確立の中心となる「真の観念」の特徴を他の虚構の観念等との比較分析によって明らかにした。スピノザ哲学における方法とは内的・反省的方法であることを明確にしえた。

スピノザの物的世界的枠組みの前提となる、『エチカ』第 2 部における思惟の及び延長の属性、対応する観念と対象(物

体)の関係を厳密に解釈した。その結果、それらは厳格な一体的関係にあり、またその決定論的性格が明らかになった。さらにスピノザにおける個物とは、決定論的な心身並行論の徹底の中で、現実的には非存在であっても、神において存在しなければならないという、スピノザ特有の個体・個物観が明確になった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

(1) 黒川勲, スピノザにおける「存在しない個物」に関する定理, 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 第 35 巻 - 第 2 号, 査読なし, 平成 25 年 10 月, pp.109~120

(2) 黒川勲・阿娜, スピノザ『知性改善論』における「真の観念」の分析, 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 第 34 巻 - 第 2 号, 査読なし, 平成 24 年 10 月, pp.115~125

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

黒川 勲 (KUROKAWA ISAO)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号: 20264319

(2)研究分担者

なし ( )

研究者番号:

(3)連携研究者

なし ( )

研究者番号: